

衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩

(第2報)

紋様表現の状態と色彩

荒井純子

On the Pattern and Color of the Ainu Clothing (2)
The Actually Realized State of Pattern and Color on their Clothings

Ayako ARAI

This is the second article on the pattern and color of the clothes of the Ainu of Japan. The author herein classified the costume designs of the 64 clothes, according to structural resemblances, to find out something in common with the 23 patterns, designed on the basis of the two basic patterns such as *Aiushi* and *Moreu*. Moreover, she attempted to examine which kinds of color the Ainu used in weaving and embroidering.

序 論

我が国の北方に在住しているアイヌ民族の衣服は、昔は草衣 (kera) 獣皮衣 (kap-ur) 鳥皮衣 (rap-ur) 魚皮衣 (chep-ur) などであったが、江戸時代の後半期より木綿、絹などの布地が交易によって入手出来るようになり、彼等の衣服として用いられるようになってからは、現在土俗品として保存されている厚司 (attushi) レタルペ (latarupe) チカルカルペ (chikar-karpe) ルウンペ (ruunpe) カバラミップ (kaparamipp) チヂリ (chigiri) モウル (mour) などである。

この民族の衣服にほどこされている紋様は、彼等特有のもので他の民族衣裳には見られないものである、私は前回にひきつづき土俗品として保存されている衣服にほどこされている紋様を更に分析しその色彩とともに記したいと思う。

彼等の紋様の元となるものは、アイウシ文 (aiushi) モレウ文 (moreu) の二種であり、これを軸としてアイウシ文は七種の変化、モレウ文は八種の変化、アイウシ文とモレウ文の混合変化として三種、その他として四種の四項目に分類した。第一報ではこれ等の紋様がどのように衣服に現わされているか資料64枚を四種に分類してその代表的な衣服の紋様について解明した。

今回はこれ等の紋様が資料のうちにどのような状態で使

表 1. 資料衣服の分類

種 類	枚 数	備 考
黒裂切伏	8	アツシ チカルカルペ
色 裂 切 伏	巾2cm 12	31 ルウンペ 白布切抜のまざり…1
	3cm 10	
	4cm 8	
	4cm以上 1	
白布切抜	23	カバラミップ 色裂切伏のまざり…1
刺繍のみ	2	チヂリ当布のないもの
計	64	

用されているか、紋様の傾向、紋様のある位置について記し、更に紋様と色彩を構成する要素として、地布地及び当布地、刺繍糸があるが、これからかもし出される彼等特有の色彩表現について記したいと思う。

本 論

第一報において64枚の資料のうち17枚の衣服の紋様を形態的に解明して見たが、前にも記したように同系統のものとして分類することは出来ても同じものは一枚も見出し得なかった。そこで調査資料のうちに紋様がどのような状態で使用されているか集計した。

1. 紋様の種類 (表 2)

アイウシ文とモレウ文が主とした紋様であることは、前にも記したが表2にもはっきりとそのことが証明される。各々の衣服に対して主となる紋様について考えても、黒裂切伏衣の場合はアイウシ文による表現は8枚で100%であり、色裂切伏衣の場合はアラ・シッケウヌ・モレウが多く13枚で凡そ42% 白布切抜衣の場合はアラ・モレウが13枚で凡そ57%を示している。従なる紋様としては各種の紋様があるが、色裂切伏衣 白布切抜衣の場合アイウシ文が多いことは当布の上又は当布と当布にかけて、コーチングステッチやチェーンステッチによるアイウシ文の線縫いがほどこされているためである。又葵文 ウタサニ文 シク文の多いのは背又は胸の紋様の中心にこれ等の紋様を一個又は左右対象に二個とりあわせているものが多いためである。

表 2. 衣服にほどこされた紋様の種類

紋様の種類	黒裂切伏衣		色裂切伏衣		白布切抜衣		刺 繍 衣	
	主のもの	従	主のもの	従	主のもの	従	主のもの	従
アイウシ文網 目 状	8		6	18	2	17	1	1
■ 網目に直線のあるもの		1						
■ 二段重ねのもの				1				
■ だぶらせたもの				1		1		
■ シクノカ文						1		1
■ つりがね形		2				1		1
■ ハート形		1				1		
アラ・モレウ		4		19	13	6		1
ウレン・モレウ				9		2	1	
アラ・シッケウヌ・モレウ		1	13	9	3			
ウレン・シッケウヌ・モレウ				5	1		1	
アイウシ・アラ・モレウ				1	3	6		
ウレン・アイウシ・モレウ				2			1	
シッケウヌ・アイウシ・アラ・モレウ				3	1	2	1	
ウレン・シッケウヌ・アイウシ・モレウ					1		1	
からくさ文				2	3		1	
モレウエトコ							1	
葵 文		4		18		7		1
ウタサニ文		2		3		15		1
シク 文		4		7		19		2
アパポピラスケ		1		1		2		
アパポエブイ				3		2		

2. 紋様の全体的傾向 (表 3)

紋様の傾向としては曲線式が凡そ41%混合式が凡そ36% 直線式が23%となって曲線系統のものが多いことがわかる。尚文様にはオホヤンケ (ohoyanke) といういばら縫いがあり、これは紋様の表現に強さ、きびしさを与え紋様全体への影響が大きい。表4によれば、

表 3. 紋 様 の 傾 向

形 式	黒裂切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	当布無 (刺繍のみ)	計	%	備考
直線式	8	7			15	23	曲線の少しあるもの各1つつ
曲線式		4	20	2	26	41	直線の少しあるもの色裂置1
混合式		20	3		23	36	
計	8	31	23	2	64		

表 4. オホヤンケの有無

	黒裂切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	当布無 (刺繍のみ)	計	%	備考
薊 有	7	26	17	2	52	81	少々ある (色裂置1 白布切抜...4 目立つもの色裂置1)
薊 無	1	5	6		12	19	
計	8	31	23	2	64		

いばらのあるものが凡そ81%である。

3. 紋様のある位置（表 5）

紋様の位置として、後身ごろ 前身ごろ、袖、衿の四個所に分けて考察した。
後身ごろは 黒裂切伏衣では背半分が4枚で50% 色裂切伏衣では背半分と裾 $\frac{1}{3}$ で13枚凡そ42% 白布切抜衣では後全面が19枚で凡そ83%を示している。刺繡衣も後全面である。
前身ごろは 黒裂切伏衣は前丈半分が6枚。75% 色裂切伏衣では前丈 $\frac{1}{3}$ が21枚で68% 白布切抜衣では前丈半分が19枚83%刺繡衣は前丈半分である。
袖は すべて袖半分が最高で黒裂切伏衣75% 色裂切伏衣48% 白布切抜衣39% 刺繡衣100%である。
衿は 黒裂切伏衣は胸なし、衿なしが5枚で凡そ63% 色裂切伏衣は衿より胸巾半分为21枚で凡そ68% 白布切抜衣も同様に胸半分为9枚で38%となっている。

紋様を構成する要素として地布地及び当布刺繡糸があげられるが、これ等は紋様というよりむしろ色彩構成に大きな役目をはたしている。

4. 地布地

主として使用しているものを分類集計すると表6のようになる。

オヒョオ厚司 全体としては7.8%の使用率であるが、紋様の表現は黒裂切伏衣として作られているものが多い。深山に自生するオヒョオの木の樹皮よりとった内皮繊維を織機にかけて布を織りあげたもので普通は褐色をしている。イラクサ厚司はレタラハエと云って白く、しなの木厚司 アカダモ厚司は赤茶色をしている。

その他 厚司以外の衣類に主として使用されているものが木綿紺無地であり凡そ42%である。この地布地は彼等が交易によって得た布を手あたり次第にとり合せて使用したことはよく理解できるが、紺系統が64枚中45で70.3% 茶系統が10枚で15.6% その他4枚で6.3%

表 5. 紋様のある位置

紋様の位置	黒裂切伏衣 8枚	色裂切伏衣 31枚	白布切抜衣 23枚	刺繡衣 2枚	計 64枚	備 考
後身 後 全 面	1	4	19	2	26	
後身 背半分と裾半分	4	11	4		19	
後身 背半分と裾 $\frac{1}{3}$	2	13			15	
後身 背半分と裾20cm以下	1	3			4	
前身 前 全 面			1		1	
前身 前丈半分	6	2	19	2	29	
前身 前巾半分丈半分	1	3			4	
前身 前丈 $\frac{1}{3}$ 位		21	3		24	
前身 裾20cm以下	1	5			6	
袖 袖 全 面			1		1	
袖 袖山全面		4	4		8	
袖 袖巾半分	6	15	9	2	32	
袖 袖口のみ	2	12	8		22	
袖 袖口なし			1		1	
衿 衿より胸全面	1	3	1		5	
衿 衿より胸巾半分	2	21	9	1	33	
衿 衿 の み		7	8		15	
衿 衿 な し			5		5	
胸 な し	5				5	衿もなし
胸 巾 半 分				1	1	衿なし

表 6. 地布地（主として使用しているもの）

布 地 名	黒裂切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	刺繡衣	枚 数	計	備考
オヒョオ厚司無地	2				2	5	7.8%
オヒョオ厚司縞(黒白青)	3				3		
紺 木綿紺無地		11	12	2	25	45	70.3%
紺 手織紺木綿		5	2		7		
紺 紺 紺			1		1		
茶 真岡木綿	1				1		
茶 黒めくら縞		1			1		
茶 黒地紺茶めくら縞		1			1		
茶 黒白双子縞	1				1		
茶 紺 茶 縞		4	3		7	10	15.6%
茶 紺 縞 木綿		1			1		
茶 茶 無 地			1		1		
茶 茶 格子 縞		1	1		2		
茶 茶 紺 格子 縞	1	1			2		
茶 茶 白 紺 の 縞		2			2	4	6.3%
茶 茶 縞			2		2		
茶 茶ねずみあざぎ縞			1		1		
茶 手織よこ縞		1			1		
茶 " 紺 格子		1			1	4	6.3%
茶 べんけい格子		1			1		
茶 紺色と白茶型おき		1			1		
計	8	31	23	2		64	

である、厚司のうち3枚は黒白青の縞であるから更に紺系統に加えられると見てもよい。

5. 当布地 (表 7)

地布地に表現される紋様の色彩は地布地につけられた当布からも現わされている。当布として使用しているものの一つに黒布がある、厚司又は木綿地の縞木綿柄などに黒裂だけを切り伏せてあるものを黒裂切伏衣と云っているが、黒い布をアイウシ文 モレウ文に伏せてその上に更にアイウシ文の刺繍がしてある。白布切抜衣は紺木綿無地の地布地の上に白布を大担に大きく切抜き紋様を表現している。裾、袂先きなどに赤無地又は赤の模様地を使用しており白と赤が主色である。色裂切伏衣は白・赤だけでなく各種繊維の美しい模様の色裂を2cm~4cm位の巾に裁断して紋様を作り多くの色を巧みにとり合せている。当布としては黒・白・赤が主な色でこの三色が単独に、又は二種混合に、更に素材の変化によりとり合せられて特有な色彩を表現している。

6. 刺繍糸及び刺繍の技法 (表 8・9)

当布をとりつける刺繍糸も色彩的に考えられるものの一つである。主なものは木綿の紺白であるが交易によっ

表 7. 当 布 地

当布の種類	黒切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	刺繍衣	計	備 考
木綿黒のみ	8				8	
木 線 白 赤			9		9	
木綿白その他			1		1	新モス柄 木綿かすり
木綿布二種以上		6	5		11	白赤真岡木綿 ナフトール金山 模様の浴衣他
木線白赤毛織 (メリンス)		5	8		13	メリンス 糸 ・みどり ・むらさき
木綿と平絹 (白虹)		9			9	
木綿と絹(ちりめんず) 小袖材料		11			11	甲斐絹ちりめん りんず小袖
無				2	2	
計	8	31	23	2	64	

表 8. 刺 繍 糸

糸の種類	黒切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	刺繍衣	計	備 考
木 紺	3	13	20		36	茶を芯にしてあるもの
綿 白	4			1	5	たこ糸ふうのもの
糸その他		2	2		4	茶白と毛糸赤白と紺
自 イラクサ					0	
製 オヒヨオ		1			1	
糸その他		1			1	イラクサとオヒヨオ
木綿糸と自製糸	1	14	1	1	17	金糸を使ったもの 木綿糸と自製糸
計	8	31	23	2	64	

表 9. 刺 繍 の 技 法

技 法 の 種 類	黒切伏衣	色裂切伏衣	白布切抜衣	刺繍衣	計	
チェーン オープンチェーン(二重)	6			1	7	
ステッチ チェーンにてアイウシ文	1				1	
コー チング 当布の一部分に		1			1	
当布の中央に一本		16	17		33	背に少々
当布の中に二本			1		1	
ステッチ 当布と当布に渡って アイウシ文として		10	3		13	
当布の両端に二本			1		1	
チェーンステッチと コーチングステッチ	1	4	1	1	7	
計	8	31	23	2	64	
コ ラ ル ス テ ッ チ	2 _△		1		3	△・○印は 同一衣服
ファゴテングステッチ	1 _△		3 _○		4	
ランニングステッチ		1	2		3	少々ある
ブローグチェーンステッチ	1 _△				1	
フェザーステッチ	1 _△				1	
ネット刺繍ふうのステッチ			1		1	
サ テ ン ス テ ッ チ			1 _○		1	
タ ッ キ ン グ ス テ ッ チ			1 _○		1	
特殊なステッチのあるもの計	2	1	7			

て得た衣服のぬき糸と思われる茶 みどりの木綿糸を使用したり、毛糸 金糸など紋様のポイントとして使用しているが、糸の色などあまり考慮していなかったとも考えられる。古い資料には彼等の自製糸であるオヒヨオ、イラクサなどの糸も使用されている。

衣服にほどこされた刺繍の技法については東京家政大学紀要第7集で報告しているが集計すると表9となる。

刺繍の技法としては当布の中央にアイウシ文をほどこしたコーチングステッチがもっとも多く、古いものと、刺繍のみの 刺繍衣には オープンチェーン ステッチが多い。又

当布と当布の間 又はお守りのように、背又は胸の紋様の中心にコラルステッチ、ファゴテングステッチなどほどこされているのも面白い。

7. 足 し 布 (表10)

資料の地布地の一部として身ごろ或は袖などにまったく異った布が足し布 補綴布 はぎ合せ布としてとり合せられているものがある。これ等の布地も色彩的に見のがすことの出来ないものの一つである。

足し布 補い布のある衣服 (図 1・2・3・4)

1. 紺無地を地布とし、裾に紺茶のめくら縞を補綴し 胴抜様に紺白の浴衣地を使用している。当布に木綿 白赤無地布、メリンスの赤布を使用している。3 cm 巾の色裂切伏せ紋様であるが背中央には背紋のように 白布切抜き紋様で特殊な葵文が表現されている。裾部のモレウ文の中央にアイウシ文のコーチングステッチが自製糸でしてある。

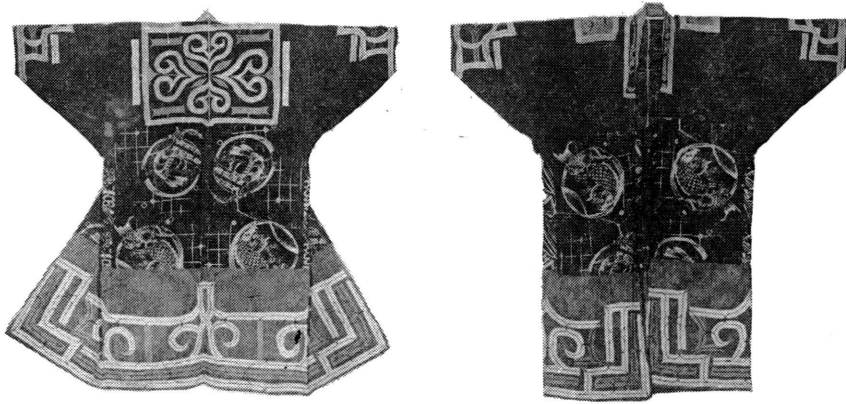


図 1. 足し布のある衣服 1

2. 紺木綿を中心に前身ごろに手織横縞木綿 後裾に胴抜として浴衣地を使用し、袖巾には紺柄を

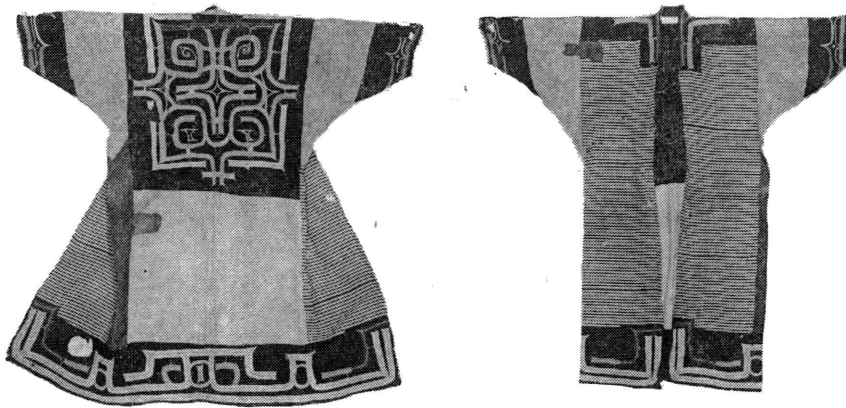


図 2. 足し布のある衣服 2

はぎ合せている。これ等とは別に身ごろに各種の補綴布がついている。

当布は、白・赤・水色・みどりの木綿地 白紅の平絹 小袖の小布などを 2 cm 位の巾に切り、各種をとり合せ色彩も豊かである。刺繍にも自製糸（レタラハエ）が使用してある。紋様はアイウシ文の変化とモレウ文が少々裾の部分に組合せられている。

3. 背及び前身上部に紺木綿 裾に紺茶のめくら縞 胴抜きとして茶・白・みどりのだんだら格子が使用してある。当布は木綿地の白・赤を使用し 2cm 巾の色裂切伏せである。裾の方は 0.6cm の巾せまい白裂が切伏せてある、背部の切伏せの中に赤紫の模様メリンス布が使用されて色どりをそえている。裾の当布と当布の間にアイウシ文の線繻いが自製糸でされている。

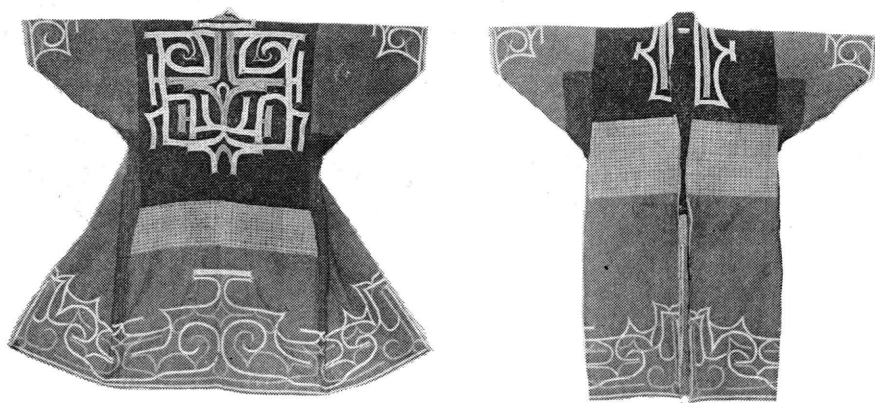


図 3. 足し布のある衣服 3

4. 木綿紺無地が地布地の主としたものであるが、身幅の足し布として両脇に柄木綿地がはめこんである。破れの補綴布のように赤色地の白型おきナフトール 小袖のりんず小布、などがつけ合せてあるが、手あたり次第とりつけた感がある。当布は木綿の白・赤を主とし、白紅の平絹 ちりめん りんずなどを 2 cm 巾位に切り シツケウ・モレウ文を主として身ごろ全面に美しく切伏せ



図 4. 足し布のある衣服 4

がされている。肩にねり糸をより合せた房がさがっており、昔の豪華な色彩をおもわせる。

当布の中央にアイウシ文のコーチングステッチが自製糸でなされており、この種の衣服は古い時代に酋長の衣服として用いられていたものが多い。

資料に現われている足し布 補い布を集計して見ると、一枚の衣服に二種或は三種の布がとり合せられて居り、64枚中6枚は二種以上のとり合せがされている。このように布のとり合せが無雑作にされているが、それぞれによく調和されていて、何の不自然さも与えないばかりか、一つのポイントとなっている場合がある。これが彼等特有の色彩感覚であると云ってもよいと思う。

樺太アイヌの衣服は北海道アイヌの衣服と紋様色彩を異にして居る、彼等のものはギリヤークの影響が多く、紋様の構想、色彩、技法、表現などすべて異なる。衣服以外の附属品についても同じ傾向がみとめられる。

表10. 足の布、補い布（表中の各印は同じ衣服六種を現わす）

布 地 名	黒 切	赤 伏	白 切	白 伏	布 切	布 伏	計	袖	胴	前	後	裾	足し布
模 様 木 綿 地		2					2	1	1				
手織型おきもよう		2					2		1				1 _a
ナフトール柄地	1						1			1			
浴 衣 地 紺 白		2					2	1	1 _c				
〃 紺 柄		1					1		1 _a				
〃 縞		1					1		1 _a				
紺 地 模 様 紺		1	1				2	1			1 _c		
し ぼ り 柄			1				1				1		
紺 白 模 様			1				1						1
無 地 (紺)		1					1	1 _a					
黒 白 棒 縞	1						1				1		
縞 木 綿		1	1				2	2 _a					
茶 縞		1	1				2	1			1		
茶 め くら 縞		1					1				1 _c		
茶 格 子 縞		1					1		1				
茶 手 織			1				1	1					
紺 茶 め くら 縞		2					2					2 _a	
茶白緑のだんだら格子		1					1		1 _a				
紺 茶 白 た て 縞			1				1	1					
むらさきメリンス		1					1		1				
小 袖 用 り ん ず		1					1						1 _b
計	2	19	7	0			28	9	8	1	5	2	3

結 論

彼等の衣服にほどこされた紋様と色彩について、各方面より検討して見たが前にも記したように紋様の元になるものはアイウシ文 モレウ文の二種でこれを各種に変化させて衣服に表現したわけであるが 紋様及び色彩構成の要素としては 地布地 当布 刺繍糸 足し布・補い布があげられ、これらが巧みに組合せられて彼等の一品の衣服が作られたわけである。布地不足の場合に別の布を補うことは、人間のなす当然の技術とは思いうが、その取り合せが自然に行われ、よく調和されていること、更にその衣服の全面或は下半分或は裾にほどこされた当布による彼等特有の紋様によって、しっかりとおさめられているところに不思議さを感じないではいられない。

これ等資料に表現されている色彩は 長い年月着用された後保存されたものであるため変腿色はひどくこれを現在の色相によって表示することは出来ない、しかし汚れと共に残っている色相をたよりに当時の色を想像することは出来る。

アイヌの色名は非常に少くて、黒・赤・白であり、黒を「クンネ」といい、赤を「フレ」白を「レタル」と云う。「クンネ」とは暗いとか、夜という意味でマンセル色相の N 1.5, N 4, N 5, N 7, 5 G 3/2, 5 B 3/2, 5 P B 3/2, 5 B G 3/2, 5 R P 3/2 など黒っぽいものすべてを云う。「フレ」とはマンセル色相 5 R 4/14, 5 R 7/8, 5 R 3/2, 10 R 6/14, 5 Y R 3/2, 5 Y R 7/14, 5 P 4/12, 5 R P 9/2, 5 R P 4/14, 5 R P 7/8 など赤味のあるものすべてを云う。「レタル」とは黒・赤に対して白いものという意で、イラクサ厚司の白さも、オヒヨオ厚司 シナノキ厚司に対しての白さ

で「レタラハエ」と云っている。その他の色としてマンセル色相 5 Y 8/12, 5 Y R 6/4, 5 Y R 3/2, 5 G Y 8/10, 5 B G 5/8, 5 B 6/4 などがある。

(以上のマンセル色相は色彩企画センター JIS 標準色紙による)

彼等の衣服の紋様が魔除け お守りの意味が強いということは第一報で記したが、紋様の構成ばかりでなく色に対してもこれ等の意味が強いようである。赤は、もえる焔を意味し、裾や袖口より魔物が入らないように赤布をつけているという、黄色は神聖な色として神事のときだけ使用し、衣服には普通ほとんど使用されていないが、背中の紋様の一部に黄みどりなどを、ポイント程度に使用しているものもある。これは背守りの意味とも考えられる。

彼等の紋様の特長として第一に云えることは立体的感じの強いことである。次に美しい紋様をよく見ると左右 上下が必ずしも同じでないことである。しかし全体として何の不均衡も感じないで、よく調和がとれている。更に紋様の傾向としても 北方系のもの 南方系のものといろいろあるがこれ等を巧みにとり入れて彼等特有の大陸的な構想でつくられている。

又色彩的に考えて見ると交易などによって得た衣服や布片を巧みに使いわけて心憎いまで美しく調和させている。紋様の分量は身分によってやかましく、身分の低い者は裾だけ、やや高い者は腰から下へ、巨酋の衣は巨酋だけの豊麗な刺繍を肩の上から背一ぱいにつけている。

本報告に色彩表現の出来ないことが非常に残念である。文字による表現であるがその美しさをご想像いただければ幸いに思う。

終りに本研究に資料提供並びにご指導、ご協力下さった早稲田大学教授桜井清彦先生、北海道大学名誉教授故児玉作左エ門先生 東京家政大学名誉教授故宮下孝雄先生に心から感謝を申し上げます。

(本研究は 本学旧職員助教授藤原智恵子先生、荒井倭子との共同研究であり、本稿の一部は昭和45・46年 日本家政学会総会において発表している)

参 考 文 献

- 1) 金田一京助・杉山寿栄男共著：アイヌ芸術，北海道（1941）
- 2) 鷹部屋福平著：北方文化研究報告 アイヌ服装紋様の研究，北海道大学（1942）
- 3) 河野広道著：蝦夷往来第3号 アイヌ織物染色法，尚古堂，札幌（1931）
- 4) 更科源蔵著：アイヌの四季，淡交社，京都（1968）
- 5) 北海道教育委員会：アイヌ民族資料調査報告，北海道教育委員会（1968）
- 6) 荒井純子・藤原智恵子：東京家政大学紀要第2集 アイヌ民族の衣生活について（第一報）（1961）
- 7) 荒井純子・藤原智恵子： " 第3集 " （第二報）（1963）
- 8) 荒井純子 : " 第7集 " （第六報）（1967）
- 9) 荒井純子：東京家政大学紀要第13集 衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩（第一報）（1973）